

第3章-3 Bブロックの研究のまとめ

Bブロック

大阪市立本田小学校（公立）・大阪市立靱幼稚園（公立）
大阪市梅本保育所（公立）・川口聖マリア幼稚園（私立）

【ブロックテーマ】 「遊びから学習へ やる気と根気を育むことを通してつなぐ教育・保育」
～遊びの中の学び（幼・保）と学びの快樂（小学校生活の Well-Being）～
【指導助言】 兵庫教育大学 溝邊 和成 教授

1 研究前のブロックの現状と課題及びテーマ設定の理由

(1) 研究前のブロックの現状と課題

これまでの各就学前施設と小学校との連携や交流の活動状況は、年間計画を立てて連携・交流に取り組んでいる施設もあれば、まだ連携をしていなかった施設もあり、様々だった。

(2) テーマ設定の理由

全ての子どもたちが楽しいと思える小学校・幼稚園・保育所であるために教員・保育士が楽しいと思える取組の研究にしようということで始まった。テーマにある Well-Being は、「身体的、精神的、社会的に良好な状態」「幸福」と翻訳されることも多い言葉で、子どもも大人も一人ひとり、みんなが「今日も行きたい、行ってよかった」と思えるような小学校・幼稚園・保育所でありたいという思いを込めた。

2 主な取組

【1年目の取組】

小学校からのアドバイスで、情報ネットワークが発展している現在、対面交流でなくても保幼小の交流ができるのでは、ということで、今年度は、以下の3つの内容で取り組むことにした。

① 相互のやりとりを通じて小学校のことを知ろう

- ・本田小学校より、先生の作詞作曲の歌で学校の概要を紹介する DVD レターを就学前施設に届けた。
- ・DVD レターを見たそれぞれの年長児が、就学への期待や不安から、給食・宿題・勉強・遊びについて素朴な質問を手紙にして、また、その際に各就学前施設の紹介ポスターと共に小学校へ届けた。
- ・6年生は一つ一つの返答を DVD にまとめる作業を行い、3年生は新型コロナウイルス感染拡大の状況下で園所の子どもの体が動かす機会が減っているのでは、とダンスを創作し、手紙の返事と創作ダンスの DVD レターを各就学前施設に届けた。



② お互いの就学前施設のことを知ろう（紹介ポスター作成）



各幼稚園・保育所の子どもたちが、自身の施設の好きなところや遊び等を出し合い、写真を交えたポスター「すきやねん〇〇ようちえん・ほいくしょ」を作成した。それを各校園所それぞれに届け、各施設内に掲示をした。ポスターを通じて他園所の友達にも関心をもつ姿が見られ、子ども自ら積極的に感じたことを質問として手紙にし、互いに回答し合うことで、親しみをもつようになってきた。年明けには同じ本田小学校に行く5歳児を1枚のポスターにして学校へ届けた。

③ 溝邊先生より教職員学習会

『遊びのなかの学びへの支援～やる気・根気・元気の発露と保障を考える～』のテーマで就学前施設と小学校の違いや遊びと学びについて、ワークを交えて考えていった。

- ・ 小学校へ入学する戸惑いや不安がなぜあるのか、就学前施設と小学校の違いは何なのか、「就学前施設にあって小学校にないもの、又はその反対」「どちらにもあるもの・ないもの」を環境・人・生活編で考える。
 - ・ 遊びや学びのそれぞれの捉え方の意見交流をする。
 - ・ 子どものやる気・根気・元気を引き出す工夫や自己発揮の保障について、教職員の働きかけを考える。
 - ・ 子どもはいつ、どこで、誰と、何を学んでいるのか。大人はいつ、どこで、誰と、何を学ばせたいのか、を意識しながら保育の充実に取り組む。
- ★今まで行ってきた保育・教育の遊びと学びの捉え方についてそれぞれ意見を出し合い、それぞれの捉え方にまちがいがいがないことを確認したことで自信をもつ機会になった。

《1年目の成果と課題》

- ・ コロナ禍の中での限られた内容の取組であったが、子どもたちは興味をもち、見知らぬ友達への親しみや就学へのあこがれ・期待に胸を膨らませる姿につながった。
- ・ 就学前教育と小学校教育の連携のゴールは、一人ひとりの子どもが、幼稚園・保育所・小学校それぞれの段階や移行期で、「困り感」をもつことなく Well-Being に過ごし学ぶことができること等である。
- ・ 就学前教育で行われている「遊び」は幼児がすでにもっている既知を生かし、様々な試行錯誤をしてその変化を楽しむという要素がある。「遊び」と「学び」の間には「知っていることを使う」という共通点がある。就学前で行って来た遊びがどのような学びへつながっていくのかを教職員が学び、より小学校へ期待をもち安心して就学できるよう、小学校との相互理解をしていくことが大切だと感じる。また、非認知的側面は、自己をコントロールする「勤勉性」、様々なものに好奇心をもつ「開放性」、他者とつながろうとする「外向性」、思いやりや協力がある「協調性」、困難なことにぶつかった時に感情的にならない「情緒の安定性」というビッグ・ファイブ理論の要素は幼少期に形成されるので、非認知面での保幼小の連携も重要である。
- ・ 次年度もネット環境の課題はあるが、小学校の授業を Teams 等、各幼保がリアルタイムに視聴したり、子ども同士がやり取りしたりできると、新しい ICT の実践として保幼小の連携が紹介できるのではと考える。

【2年目の取組】

1年目の取組で学んだことを生かし、各施設でも、子どものやる気、根気、元気を引き出す遊びから学習につながる姿を探り、自己発揮の保障をする働きかけをしながら保育・教育をすすめていくこととした。

○ 1年生と就学前施設とのリモート交流

1年生と5歳児、1年生と就学前施設教職員とリモートで交流をした。1年生は得意なこととして国語の本読みや足し算、文字を書くなど、自信をもって発表した。また、就学前施設の子どもたちは、1年生に小学校における不安や疑問を質問して応えてもらったり、今頑張っている遊びの話をしてほめてもらったりした。また、画面を通して一緒に『にじ』の歌を歌ったり、校長先生と話をしたりして、1年生や先生に対して親近感や憧れ・期待が膨らんだ。リモート交流では、昨年度一緒に過ごしたお兄さん、お姉さんが、1年生となって自信をもって一人ひとり得意なことを発表している姿や小学校へ行って意欲をもって楽しく学校生活を送っている姿をリアルタイムで見ることができた。そのことで就学前施設の子どもたちは、学校はドキドキするところではなく、力を発揮するところ、得意なところを伸ばせるところと感じ、就学前施設の子どもたちが、より小学校に行くことを楽しみにするきっかけとなった。1年生にとっても自分自身の成長を感じる機会となった。また、就学前施設、小学校の教職員も幼稚園・保育所で得意だったことが、1年生となり好きな科目につながっていること、そして自信をもっていきいきと発表している様子から成長を感じる事ができた。



○ 就学前施設間でのポスター・DVD 交換

各就学前施設の5歳児が作った紹介ポスターと、共通で歌っていた『にじ』の歌や体操の動画をDVDにして、それぞれの就学前施設に届けた。そして届いたポスターやDVDを見て一緒に歌ったり体操をする中で、それぞれの就学前施設や友達に関心を持ち、それぞれの5歳児が各就学前施設へ感じたり思ったりしたことを手紙にして届けた。



○ 保幼小の交流

・各就学前施設の子どもたちは、ポスターやDVDのやり取りで見ていた友達に会いたいと、手紙を書き、短時間ではあったがそれぞれに交流を行った。楽しみにしていた子どもたちだったが、いざ他施設の友達を目の前にすると緊張や恥ずかしさもあり、始めは声を掛けられずにいた。しかし、遊び始めるとすぐに言葉を交わし、お互いに名前や小学校名を聞いたり、誘い合って遊ぶ姿が見られた。初めての遊びに戸惑っていた友達に「こうやってするねん」と得意げに教えたり、友達が挑戦する竹馬を支えたり技を見せ合ったりするなど、それぞれの刺激を受け、意欲や自信につながった。



2学期、就学前施設から本田小学校へ質問の手紙を届けに行く。質問に対して校長先生に一つ一つ丁寧に応えてもらったり、リコーダー演奏を聞かせてもらったりした。その後、教室を見学し、お兄さんお姉さんが休み時間に過ごしている様子を見て話をしたり、授業のチャイムの音で実際に教室に戻っていく姿を見たりするなど、学校の様子

を知ることができた。

- ・3月、コロナ禍で、小学校への訪問や交流が難しく、困っていたところ、本田小学校の先生方から1年生の一日の生活の様子の映像が届いた。早速、5歳児が視聴したところ、算数や生活科、体育の授業を受ける様子や給食の様子を実際に見て、今後の小学校生活に関心を持ち、見通しをもつことができた。「体育の時は体操服に着替えているね」「給食の時も服が違うな（エプロンをつける）」「縄跳びは幼稚園でもやってる！」「これは何の勉強をしているのかな？」と子どもたちから様々な気付きや発言があった。幼稚園と一緒にいるところ、違うところ、について知ることができた。「早く体育やりたい」「算数楽しみ！」などといった、期待の声もたくさんあがっていた。小学校の先生方が進学前の子どもが小学校生活に期待をもてるように、不安がないようにと気を配っていただいたことを子どもたちに伝えると、小学校の先生にも親しみを持ち、小学校がより安心なところを感じたようである。



○ 各就学前保育・教育での育み

各就学前施設の教育・保育の取組の中での学びや育ちを子ども達の自信として小学校につなげていきたいと願う。就学前施設の Well-Being をそれぞれ探った。

① 大阪市立鞆幼稚園

《テーマ》 考えたり工夫したりして遊ぶ中で、人と関わり
充実感を味わう幼児を育てる

《遊び・活動》 ～大阪城公園への園外保育から運動会へ～

10月、5歳児2クラスの子どもたちは園外保育で大阪城公園に出かけ、そこで、石垣の積み重なっている様子や、大きな一枚岩を見て、その大きさや形に驚き、関心をもった。

園外保育の次の日、「幼稚園で大阪城をつくりたい！」という子どもたちの思いから、さっそく大阪城づくりが始まった。幼稚園にある素材や、家庭からもってきた素材から、どのようにつくっていくのか友達と話し合い、つくっていった。

大阪城をつくる中で、石垣づくりも始まり、積んで遊ぶようになった。より石垣に見えるように色を塗ったり大小いろいろな大きさの石垣をつくったりするようになった。

つくった石垣をいろいろなところに散りばめて、「どっちが高く積み上げられるのか競争しよう！」ということになり、チームに分かれ、時間内にどれだけ高く積み上げられるのかを競うこととなった。競争する中で、どうすればもっと高く積み上げられるかについて話し合いも行った。とにかく積み上げたいと遊んでいたところから、崩れないように置き方を工夫したり、土台になる部分を支えたり、また、どんなサイズの石垣から積むのかなど、考え試していた。教師は、子どもたちが高く積み上げる様子を見守った。だんだん石垣を積み上げるのが上手になってきたので勝敗が目で見分けて分らなくなってきた。勝敗のつけ方をどうすればいいのかを子どもたちと一緒に考える機会をもった。

各クラスの積んだ石垣を近づけて比べるリボンが一番高い石垣に合わせて横の高さを見るなどいろいろな意見が出たが、「近づけている間に石垣が崩れる」「見た目ではわからない」となった。しばらく考えていく中で「石垣の一番下から、一番上までの長さを図ってリボンで切って、2本のリボンの長さを比べたら」ということに気付いた子どもに、みんなが共感した。

園外保育の経験より、子どもたちの興味・関心を遊びの中に取り入れて活動してきたことを、運動会でクラス対抗の団体競技に取り入れた。

クラスとして取り組む楽しさや話し合いを通して、自分の考えを相手に伝えたり、相手の気持ちを聞いたりして協力すること、嬉しい気持ち・悔しい気持ちなど様々な気持ちを味わい、充実感や達成感を味わった。また、友達とルールや約束ごとを考え、力を合わせる楽しさも味わった。日常の活動を通して、自分なりに見たこと感じたことを表現する経験を積み重ねることで、友達と共通のイメージをもって遊びに必要なことを考えたり工夫したりし、自信や意欲を高めた。



② 大阪市立梅本保育所

《テーマ》 みんな違ってみんないい。自分のできる力を発揮し、それぞれの目標に向かってあきらめず何でも取り組みよう！

《遊び・活動》

去年の年長児にあこがれ、「自分達も竹馬に乗りたい」と春から竹馬に取り組むことにした。実際に竹馬を手にして「重たい」「難しい」と言いながらも、フェンスを支えにして乗ったり、片方だけ持って乗ったりと、自分たちで試行錯誤しながら挑戦する姿があった。「みんなで竹馬をしたい」という子どもたちの声から、クラスでどうしたら乗れるようになるのか考えた。少しずつ乗れるようになった友達から「竹馬を斜めにする」「かかとを上げて歩く」「バランスをとる」などのコツを教えてもらい、意欲的に練習を重ねた。一定の距離が歩けるようになると、自分たちで考えた《カニ歩き、後ろ歩き、ジャンプ、一本跳び》など、それぞれの目標に向かって新たな挑戦をして楽しんだ。うまく乗れなくてあきらめかけていた子どもも友達の様子に刺激され、こつこつ挑戦するようになり、クラス全体のやる気に広がった。始めは自分のことで一生懸命だった子どもたちだったが、友達の取り組む様子を見て、「〇〇ちゃん、あきらめずに毎日頑張っている。」「今日は3歩進めるようになっていたよ。」などの声が聞かれ「みんなちがってみんないい。あきらめない。」の合言葉と共に、自然とお互いに目を向け認め合い励まし合う姿へと育ってきた。それぞれが自分の目標に向かって挑戦し、『みんなでワクワク』で達成感を味わい自信につなげた。竹馬で自信をつけた子どもたちは、次への新たな目標をもち、自分たちで遊びを選びながら《なわとび、けん玉、コマ、ドッジボール》と様々な遊びに意欲的に取り組んだ。本を見たり話し合いをしたり教え合い声をかけ合ったりしながら一つ一つコツをつかんで技を磨いた。それが第2のブームとなり、『ワクワクタイム』でも披露した。積み重ねてきた遊びが自信となり、もっと難しい技に挑戦したい、もっといろいろな人に見てもらいたいと今も挑戦が続いている。



また、収穫したお芋を乾かしていたある日、小さい順に並べ始めた友達を見て「どっちが大きい？」と比べながらみんなも並べ始めた。「全部で何個ある？」と言いながら数え始めるが何回数えても途中でわからなくなり、どうしたら全部数えられるのか保育士も入って一緒に考えた。「いっぱいあるから分けたらいい。」「ちょっとずつにしたら。」など子どもたちの言葉をヒントに保育士が「10 ずつのかたまりにしてみる？」と伝え、かたまりを作り、「全部で117 個あったよ。」と嬉しそうに伝える姿も見られた。

保育士が子どもたちのやりたい気持ちに合わせて環境を準備し見守る中で、子どもたちが安心して遊びを選び、嬉しい、楽しい、悔しいなど様々な気持ちや感情を味わい、対話や話し合いを大切にしていくことで充実感や達成感となり、考える力、やる気、根気を育んできた。それが、主体的・対話的で深い学びにつながった。



③ 川口聖マリア幼稚園

《テーマ》 言葉で伝えるって楽しい!! 自分の思いを表現しよう!!

《遊び・活動》

今年の年長児は、全体的に反応や感情の表現が乏しく、特に言葉で伝えることが苦手な傾向が見られ、今回のテーマ『ことばで伝えるって楽しい!! 自分の思いを表現しよう!!』に至った。自分の気持ちを発信したり、年長児の自覚をもてるよう、新入園児のお世話を活動に取り入れることにした。初めての園生活に泣いてばかりの新入園児に、何と声を掛けていいのかわからず立ちつくして終わった1日目。子どもたちと振り返りを行い、新入園児はどんな気持ちでいるのだろうか、その気持ちに寄り添うために必要な声掛けは何かなどの案を出し合い、実践を繰り返した。始めは無言で全てやってあげるだけだったが、次第に3歳児（新入園児）が自分でできるように言葉がけをするようになった。普段あまり積極的に活動するタイプではない子どもも、「年下の友達が好き」という新たな一面を発見することができ、3歳児と関わることで自信に繋がり、自分たちの言動に反応が返ってくる嬉しさや、やりがいを感じ、気持ちの変化が見られるようになった。



一つのことに集中して取り組んだり向き合うことが苦手な子どもたち。1学期、少しでも「できない」と感じるとあきらめてしまう様子が見られる。そんな中、造形活動で蛇腹折りに挑戦した。手先が不器用な子は、諦めそうな表情で、保育者の援助のもと、一緒に取組を進めていった。活動後、遊びの中で蛇腹折りを取り入れた制作を楽しむ子どももいたが、苦手意識をもち興味を示さない子もいる中、テーマを「海の生き物」に変え、友達と協力してたこやいかの足を蛇腹折りでつなげる活動に発展した。ああでもないこうでもない友達同士で積極的に教え合う姿も見られ、苦手だった子どもも何度も繰り返し取り組み、友達と一つの目標に向かって作り上げていく楽しさや達成感を味わう活動となった。



新入園児との関わりで「伝わりと嬉しい」という気持ちの芽生えから徐々に友達との関係にも変化が現れた。少人数で遊ぶことが多かった子どもたちが声をかけ合い、意見しながら日々違う遊びを生み出す姿が見られ、伝え合う大切さがプラスされていった。ちょうどそのころ梅本保育所との交流があり、とても楽しみにしていた子どもたちだったが、いざ他施設の友だちを目の前にすると緊張や恥ずかしさもあり、自分から声を掛けられずにいた。しかし気後れして対応できないのではないかと保育者の心配をよそに、梅本保育所の友だちが積極的に声をかけてくれたことに対してすぐに反応するという変化が見られた。その結果、行動を起こし言葉で伝えることで、お互いに名前を聞き合い、一緒に仲良く遊んだ経験ができ、就学に向けてさらに期待がもてたようだった。

④ 本田小学校

《テーマ》「遊びから学びへ やる気と根気を育むことを通してつなぐ教育・保育」

～ 遊びの中の学び(幼・保)と学びの快樂(小学校生活の well-being) ～

大阪市立本田小学校 錢本三千宏

《はじめに》

「どの赤ん坊も 神はまだ人間に絶望していないというメッセージを携えてくる」と語ったのはノーベル賞を受賞したインドの詩人タゴールの言葉である。私たち小学校で勤務する者が幼稚園や保育園にお邪魔して、子どもの姿を観て素直に感じることはこの言葉に集約されている。絶望の反対語である希望と有望をもって園で活動している子どもが、「勉強」という名の行為によって希望を失わせるようなことがあってはいけない。保幼小の連携は円滑な接続の為だけに行うのではなく、保幼小を通じた遊びと学びの快樂を保障するためにある。本校は GIGA スクール構想の実現やコンピテンシー・ベースのカリキュラム研究に取り組んでいるが、保幼小の連携に関する研究に絞って報告する。

1. 遊びの観点からのカリキュラムを見直し

「ホモ・ルーデンス(遊ぶ人)」の中で「人々に真に遊ばれたものが文化になる」ことを述べたのはヨハン・ホイジンガーである。彼の理論に従えば、保育園や幼稚園で遊んだ「色水遊び」や「泥遊び」、「絵本読み」や「劇遊び」、「鬼ごっこ」や「追いかっこ」といった遊びが小学校では理科や生活科、国語科、体育科といった教科(文化)につながる。児童が教科の本質に迫るには教科の内容を伝達するだけでは不十分で活動や体験を通して「教科の内容で遊び」なおすことが必要である。知識を伝達するだけの学びでは、教科学習において文化的なアプローチはできない。5年生「ものの溶け方」の学習では、「溶けたものが水の中で拡散し、均一に広がり透明な水溶液になる現象を『水に溶ける』という」ことを学ぶ。「深い学び」を誘うために実験を行う。食塩、でんぷん、インクなどを用意し、水に溶かす活動をする。でんぷんを水に入れてかき混ぜると濁り、しばらく放置すると底にでんぷんがたまる。この時、夢中になって保育園や幼稚園で泥水遊びをしたことを思い出すかもしれない。この現象は「水に溶けていない」ということを学ぶ。食塩やインクを水に入れてかき混ぜると濁りが消え透明になる。この実験によって「水に溶ける」現象を体験する。しばらく放置しても沈殿はない。園の色水遊びで使った水は食紅やアサガオの花弁の色素が「水に溶けたもの」だと思い出すかもしれない。園での遊びとの相違は体験(遊び)を理科の用語として言語化することだ。これが教科(文化)の特徴である。本校では、遊びに没頭する保育園や幼稚園の姿に「深い学び」があると考え、遊びの観点からのカリキュラムを見直し授業改革に取り組んでいる。

2. 「3つの資質・能力」の継続性の観点からのカリキュラムによる実践

今回の学習指導要領では特に「キー・コンピテンシーベース(資質・能力ベース)」の改革が重視され、小学校教育だけでなく幼児教育においても「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」の「育成する3つの資質・能力」が示されている。

就学前施設で育った「感じたり、気付いたり、分ったり、できるようになったり」「考えたり、試したり、工夫したり、表現したり」「よりよい生活を営もう」とした園児が小学校に入学すると「実際の社会や生活で生きて働くこと」「未知の状況にも対応できること」「学んだこ

とを人生や社会に生かそうとすること」をめざして学習するように学習指導要領は設計されている。このように以前の学習指導要領より就学前施設と小学校の「キー・コンピテンシー」の接続が明確になっている。それゆえ保幼小の連携の実践がしやすくなったと感じている。

3. 「資質・能力」の育成をゴールにした「逆向き設計論」で小学校の学習の問い直し

キー・コンピテンシーを重視した学習指導要領が告知されたことを踏まえ、本校ではまず、単元末や学年末といった最終的な子どもたちの姿から遡って単元を設定し、その時点で子どもたちが「生きて働く知識及び技能」や「未知の状況にも対応できる思考力、判断力、表現力」などの目標に到達できたかをパフォーマンス評価などを用いてどのように判断するかという評価方法を授業の前に考えることにした。その理由は、目標と評価をより厳密に一致させるためである。このように学習経験や指導を計画する前に目標と評価方法を一致させる方法を「逆向き設計」という。

また、教師が①どんな目標を設定し②評価方法を考え③指導を計画すべきかというように、教師を主語に考えがちであったが、同時に子どもは①「何を知り、理解し、できるようにならないのか」②「どのように求められていることを達成したと示せるのか」③「どのような学習経験を必要としているのか」というように「子ども」を主語にした学びの設計をする必要があると考えた。これも「逆向き設計」の特徴である。「教科書の内容を教えるためにどんな発問や指示をしようか」「どんな教材を用いようか」というような「教師の指導」に焦点を合わせすぎず、「子どもたちに必要な学習は何か」「どのような学習が求められているのか」「何をもちて学びが達成されたと示せるのか」という「子どもの学習」にも焦点を合わせるべきではないかと考えた。これは幼児教育の実践から学んだことである。

4. 評価の問い直し

就学前施設で行われている幼児教育に学び、小学校での学習を問い直そうとしたとき、併せて評価も問い直さなければ、本当の意味での学習の問い直しにはならない。いくら教師が目標にもとづいて実り豊かな学習を生み出そうとしたとしても、もし最後にいわゆる「標準テスト」のみが実施されれば、子どもたちは暗記したり覚えたことを再生したりすることに力を注いでしまう。実は、本校で実践している「逆向き設計」論を提唱しているウィギンス博士らは、「真正の評価」論を提唱している。例えば先ほどの5年生の「ものの溶け方」では次のような評価(テスト)を課題として与えている。「今流行しているパンケーキを作ろうとしましたが、小麦粉と砂糖を混ぜるところを、誤って食塩を混ぜてしまいました。食塩だけを取り出すにはどうすればいいか、根拠を明確にして実験計画書を作成し、実際に実験し。小麦粉と食塩を分離してください。」このような評価を本校ではパフォーマンス評価と位置づけ、標準テスト以上に重視している。指導内容や指導計画も重要であるが、どのようなパフォーマンス評価で児童のキー・コンピテンシーを評価するかは指導者の力量の試される場所である。そして児童が提出した実験計画と実験結果をルーブリックによりどのように明確に評価していくか。これは、現在、本校の研究の柱となっている。

《おわりに》

本校は平成 27 年より大阪市教育委員会「がんばる先生支援」を受け、大阪市立韮幼稚園と「小学校で豊かに学び続けるための幼小の効果的な接続に関する研究」に取り組んできた。その研究を通して、園児と児童の交流だけでなく、幼稚園と小学校の教職員が保育や授業実践交

流を行うことが有効であることが確認できた。しかし、新型コロナウイルスの感染予防と小学校の学習進度の正常化のため指導実践の交流ができなかったのは残念である。本校が行っている「4つの小学校教育の問い直し」は、この研究から生まれてきた。今回は1園1校の実践が大阪市立梅本保育所、川口聖マリア幼稚園と広がり、対面交流はなかなか叶わなかったが、オンラインで保育や教育の交流ができたことは幸せであった。

3 Bブロックの研究のまとめ

【取組内容】

R2年度	取組内容	R3年度	取組内容
4月		4月	
5月		5月	
6月		6月	6/14 リモートで取組内容・年間計画の検討。 1年生と各園所5歳児とのリモート交流
7月	7/7 (本田小学校にて) 事業説明・顔合わせ・ブロック会議。	7月	↓
8月	8/24 (本田小学校にて) 取組内容・年間計画の検討。	8月	
9月		9月	各自園所より児童、施設紹介ポスターと うた・体操のDVD映像配付
10月	小学校より、就学前施設へ学校紹介 DVD映像配付。	10月	鞆幼稚園へ手紙配付・交流
11月	各園所より、各施設へ施設紹介ポスター 配付。	11月	川口聖マリア幼稚園へ手紙配付・交流 本田小学校へ手紙配付・交流
12月	各園所より、各施設へ質問の手紙配付。 12/4(川口聖マリア幼稚園にて) 溝邊先生による教職員学習会 (15:00~17:00)	12月	12/14(川口聖マリア幼稚園にて) 取組の様子を話し合い検討 12/23 幼保の交流
1月	小学校より、就学前施設へ 質問の返 事及び体操のDVD映像配付。	1月	1/18(川口聖マリア幼稚園にて) 研究成果について話し合い(延期)
2月	各園所より、各就学前施設へ 各小学 校へ行く児童の紹介ポスター配付。 小学校へは、本田小学校へ行く3か 所の施設の子どもを1枚のポスターに し配付。	2月	2/6 最終打ち合わせ。研究成果の振り 返り 2/22 研究報告会
3月	3/10(川口聖マリア幼稚園にて) 溝邊先生による教職員学習会 (16:00~17:30)	3月	小学校より就学前施設へ1年生の生活 についてDVD映像配付

【研究の成果】

- ・コロナ禍により対面での交流はかなわなかったが、ポスターやDVD、オンラインによる交流等様々な工夫で交流することができた。
- ・交流を通して、保育所・幼稚園・小学校に「今日も行きたい、行けてよかった」と子ども・保護者・指導者が思えるような Well-Being は保幼小連携の柱になることが分かった。
- ・組織連携には3つの壁があると言われる。時間と活動内容、そして指導者の3つである。コロナ禍により活動は大きく制限されたが、意見交流の工夫を図ることでこの3つの壁の垣根を低くすることができた。
- ・縦(保幼と小)と横(保幼)の連携が、それぞれの教育活動に新たな視点をもたらし、幼児教育と児童への教育を豊かなものにすることができた。
- ・小学生は保育所・幼稚園の先生や園児とのオンライン交流を通して、交流体験への思いや願いを膨らませ、自分自身の成長を感じ取っていた。保護者からも子どもがオンラインで先生や園児の皆さんとお話でき、喜んで帰ってきたという反応が寄せられた。
- ・保育所・幼稚園の園児は自分たちの言葉で小学校への疑問を届け、DVD やオンラインで交流することで、小学校への期待をもつことができた。
- ・保育所・幼稚園からのポスターを小学校の職員室前に常時展示することで、全校児童が新入生の入学を待ち望んでいた。

【今後の課題】

- ・インクルーシブ教育の視点での連携を進める。
- ・指導者同士の実践交流を進める。
- ・コロナ禍が終息すれば年間カリキュラムのすり合わせを行い、無理のない交流計画を立て、保育所・幼稚園・小学校の実践の交流と相互理解を図る。

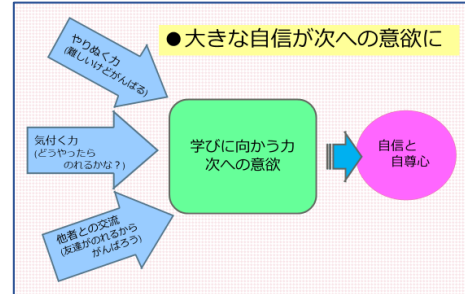
4 指導講評 講師：兵庫教育大学 溝邊 和成 教授

(記録：大阪市保育・幼児教育センター職員)

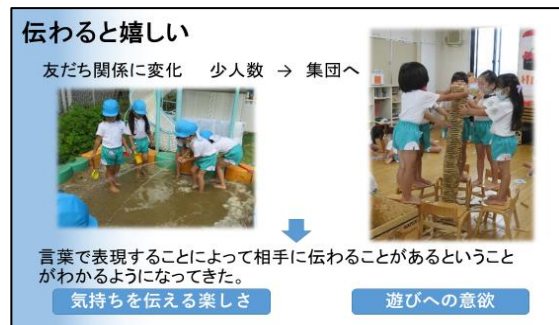
- ・就学前の教育が小学校或いは中学校へつながると考え、「遊びから学習へ」とテーマにされた。生涯において遊びが原点である。就学前施設ではその原点をつくっていく必要がある。
- ・取組内容では、お互いのことを知ろうとDVD映像配付やポスター作成など、いろいろな方法論が成立していた。コロナ禍の中、新しい交流の方法を模索し、オンラインのシステム交流も行われた。オンラインだからこそ少人数で、個々に交流することができたのではないか。また、就学前施設の子どもたちからいろいろな問いを受けて、小学生が答えを考えた。その交流内容から、先生も子どもたちも不安から安心をどう作りだしたらいいのかと考える機会となった。オンラインであっても互いのことを知り、就学前施設の子どもたちが小学校に上がる時、安心できる心の交流となったのではないか。また、教職員学習会では、就学前施設と小学校の違い、遊びと学びとはどういったものなのかを考えた。その違いから子どもたちの不安が生まれるが、知ることで安心となり、学びが続いていくのである。
- ・各就学前施設の取組では「遊び」がキーワードになっている。「遊び」そのものがいろいろな子どもと交流し、社会性を育てていく。「遊び」がいろいろなことが分かっていく道具に

なると考えてもいいのではないか。

- ・梅本保育所のテーマ「みんな違ってみんないい」には深い意味合いがある。言い換えると「みんないいからみんな違う」みんなの存在が認められているからみんな違っていても大丈夫なのだ、ということである。また、「みんな違いがあるのだ」ということを踏まえた上で取組を考えていく。
- ・竹馬での取組では、少し分かっている人に教えてもらおうと分かりやすく教えてもらえる。とてもよく分かっている子どもが全く分かっていない子どもに教えるとなると段差があるので、丁寧なコツとして教えるのが難しい。しかし、少し分かっている子は全く分かっていない子には教えやすい。教える、教えられる関係性は大きな信頼性を生む発達段階では非常に大きな意味合いがある。課題克服をするために精一杯子どもたちは知恵を出し合ったり力を出し合ったりし、それが意欲や自信へとつながっていく。自信が次への目標につながっていき、スキルが形成されていく。そして次への遊びに発展していく。
- ・子どもたちはいろいろな感覚を働かせながら、対象理解を進めている。クロスモダリティ効果、いろいろな諸感覚が複合されて物を理解する。人が対象を理解するにはこのことが原点になっている。並べて数える、数える方法が十分でない時に先生の働きかけで10の固まりで数える。芋ほりから並べて数えるまでの連続した学び、昨今よく言われている「STEAM教育」につながる。STEAM教育の「Mathematics」(数学)の部分がここに発揮されている。「なぜ、どうして？」をいかに作り出すかが非常に重要。ここに焦点を当てた働きかけが今後ますます重要になる。



- ・川口聖マリア幼稚園では、「言葉」＝「自分の思いを表現すること」として重要視された。これからの教育に携わっていく子どもたちに重要な力である。異年齢集団の交流の場では、相手を思いやった行為・行動とともに言葉が必要になってくる。伝わりと嬉しい。まず、自分の思いを伝える、そして伝わる喜び、お互い伝え合うところまで高めてほしい。この時に「言語化」が重要になっていく。
- ・造形活動の蛇腹折りに見られるように、ちょっと難しい課題に対し、どのようにやっていけばよいのか、子どもたちが考える。造形活動での表現そのものが他の活動や教科につないだり引き寄せたり高めたりしている一つの大きな柱となる。
- ・韮幼稚園の大阪城公園で体験した大きな刺激は、文化遺産である大阪城の石垣を再現したいという、STEAM教育の「Art」(芸術)が見て取れる。また、自分たちで共同制作をすることで理解の表出が見て取れる。子どもたちの発想から遊びが展開し、箱を高く積み上げる、そしてどちらが高く積めるかを競うという活動に至る。高さを比べる、これは小学



校の算数の指導、長さに展開できるような「mathematics」（数学）の観点から見て取れる。何度も挑戦する STEAM 教育の「Science」（科学）、いかにベストにもっていくのか「Technology」（技術）、どう積みあげていくのか「Engineering」（工学）、子どもたち自ら課題を見つけ、意欲をもって取り組む、全て遊びの中から出てきており、展開されている。

- 遊びの観点について、遊びそのものが生き方であり生きた証明、真の学びである。幼稚園等では知識、及び技能の基礎を、小学校ではそれらを生きて働くようにする、基礎は同じと考えていい。より良い生活を営もう、人生、社会に生かそう、連続していると考えの方が自然であり、違うように指導しようという考えは必要ない。身の回りの環境にどう対応しながら生きていくのか、それが真正の学びである。それらは遊びの中に成立する。だからこそ先生の声掛け、見取り、働きかけ、応答を重要視する必要がある。

遊びの観点

- ヨハン・ホイジンガー「ホモ・ルーデンス」
- 「人々に真に遊ばれたものが文化になる」
- 保育園・幼稚園で真に遊んだ体験・経験が文化としての教科に繋がる。
- 学校の勉強文化によって真に遊んだ経験をつぶさないようにする。
- 夢中になって学習に取り組む**真正の学び**を重視していく。

真正の評価の観点

- 「真正の評価」とは、**現実の状況やそれに近い状況**において、学習者が学んだことが実際に生きて働くものとなっているかを評価することの重要性を指摘する考え方。
- 保育の現場では「仲よくできるかとか、自分の意見をちゃんとと言えるかとか、目的をもって協力し合えるか」というように「真正の評価」が行われている。
- 勉強文化を**本物の学び**にするため「真正の学び」「真正の評価」の研究を行っている。

- 研究は、教職員間で相乗効果が見られ、必ず取り組む必要がある。インクルーシブ教育、個別最適化についてももう一度考えていくことが重要である。就学前から小学校、それから中学校に向かっていくカリキュラムの在り方、教育の在り方を共同で省察、リフレクション（振り返り）をやっていく必要がある。昨日の子どもから今日の子どもを捉え、明日の子どもを予想する。リフレクションを一緒にやっていくことでよりよいものが展開できるのではないだろうか。

5 参加者のアンケートから

- コロナ禍の中で、様々な方法を駆使して交流、連携の在り方を模索し、実行されていることに教職員の意識のもち方が大切であると感じた。
- それぞれの施設で保育・教育活動を充実させ、学びの連続性を意識して教育を進めることは、どのような状況でもできることであると感じた。今回の報告内容を自園の保育の充実に生かしていきたい。
- 遊びから学びへつないでいく実践を聞き、保幼こ小が同じ方向を向いて連携している点が羨ましかった。このような実践をしている報告から連携の大切さが広がっていくことを願う。
- 子どもも大人も楽しい取組にすることを共有され、今できることを工夫し、ありのままの子どもたちを受け止め、丁寧に育ちを見つめてこられたことがよく分かった。
- 就学前施設で子どもたちが遊びの中でどのような力をつけ、小学校でその力がどのように育っていくのかが理解できた。保幼こ小の交流は、保育者や教職員にとっても良い学びとなる機会だと思う。

6 資料

《各就学前施設から小学校への疑問・質問》

Bブロック

子どもたちの疑問・質問

施設について

- 学校は何階までありますか。
- トイレは何個ありますか。
- どこにありますか。
- 学校は広いので、初めての人は迷子になりませんか。すぐにわかるようになりますか。
- 体育館はどれくらい広いのですか。

給食について

- どんなものが出ますか。
- 残すことはできますか。
- 多め、少なめにできますか。
- みんなで準備をするんですか。
- みんな給食着を着てたけど、自分たちで給食をつくっているの？

宿題について

- いっぱいありますか。
- どのくらい時間がかかりますか。

勉強について


- テストが0点だったらどうしたらいいですか。
- 算数が全然わからんけどどうしたらいいですか。
- ふざけてばかりいたらどうなりますか。
- 授業って何ですか。

遊びについて

- ブランコや竹馬、一輪車はありますか。
- お母さんが、学校は遊ぶ時間がないって言ってたけど、遊ぶ時間はありますか。
- 粘土はありますか。いつ使いますか。
- 休み時間は何ができますか。

先生について

- 何人いますか？こわいのですか？



《就学前施設間交流》

「お互いのことを知ろう」

ポスター

同じ小学校に行くよ！

